



## 「言葉」の処方箋

岡田 安弘

若者の話し言葉に乱れを感じる昨今です。「全然OKよ」と言う会話を耳にすると、「日本語が泣いとるぞ」と、独りつぶやいています。「全然」の次に来るのは否定語のはず。我々世代の「全然」は「まるっきり駄目」という時に使っていましたよね。観念するしかないのでしょうか。

たまたま観たTV番組で、かつて日本に留学し日本語が話せる米国の若者が、「全然、大丈夫」と言っていたのには、驚きが嘆きを通り越しました。

「絶対」とか「とても」も必ず否定語を伴っていました。かく言う自分が「絶対、これがいい」と使ってしまいます。苦笑するしかありません。つくづく、言語は生きものだと思う。たくさんの人が使い出すと、国語辞典も追いかげざるを得ない。手元の大辞林で「全然」を引くと、否定語と説明したうえで、末尾に「話し言葉の俗な言い方」「非常に良いという使い方もある」となっているではありませんか。

10年ほど前になるでしょうか、朝日新聞の1面コラム「天声人語」が、米国で半世紀近く暮らす日本人女性からの手紙を取り上げていました。この人は日本語の「ら抜き」が母国で広がっているのに驚いています。「後生大事な母国語が、得体の知れぬものへと変身、私の言葉は地球温暖化で徐々に海水が上昇する南方の島々のごとく、だんだん立つ瀬を失っています。もはや私の日本語は冷凍食品ですか」と嘆いていました。

テレビ画面のテロップ(字幕)は難聴の方にはありがたいですね。例えば街の声を聞く番組で「・・・の参加資格は？」と問われ、マイクを向けられた人が「どなたも出れる」と応えました。字幕では「どなたも出られる」と「ら」を加えて表示している。話し言葉が乱れても、書き言葉は懸命に頑張っているなあとうれしくなる。たまに字幕も「ら」抜きのままがあると、がっかりです。

NHKニュースが「等」を読み間違えていたの

を思い出しました。「〇〇表彰は〇〇さんなど5人が受けた」と読んでいた。〇〇さん「ら」と言ってほしい。「ら」は人を表す名詞について複数を表し、「など」は人以外の事柄に用います。

さすがに「馬から落馬」と言うアナウンサーはいません。しかし、同義語の誤用はまかり通っています。「注目を集めている」という表現は、今や決まり文句のよう。「注目」と「集める」は似たもの同士だと思いませんか。「注目される」と言えばすっきりします。「第1回目」の第と目も同じように、第1回か1回目とすべきです。

「ほぼ断定」もよく見かけます。「断定」が「ほぼ」では断定になりません。「断定に近い」なら許容範囲かな。「不審火の疑い」はいただけない。「不審」は疑惑そのもの。最近読んだ本に「・・・は8月下旬以降に先送りされる公算が高い」とあった。「高い」は誤り、「大きい」が正しい。略して公算大。公算高とは言わない。

えらそうに講釈をたれていますが、自省を込めて失敗例を打ち明けます。先輩への手紙に「耳障りが良いので・・・しました」と書き、「耳障りは、良いときには使わへんで」と叱られたことがあります。

近く著書を出す予定の甥っ子に、この教訓を急いで伝えねばと思いました。その返信には参りました。「叔父さん、僕は漢字に弱いので執筆には各種辞典を引きます。指摘されたケースは僕が確認した辞書によると、耳ざわりが良いときは耳触りと書き、悪いときに耳障りと書くようです」と教えられ、老婆心にも注意が必要だと学んだ次第です。

最後に質問をしてペンを置きます。

<問い> 次の文章の誤りを指摘してください。「売場の照明を25%減らしたり、駐車場以外の照明を消して対応している」。



<答え> 前段で「減らしたり」とした場合、後段は「消したりして」とするのが正しい。「したり」と書けば「したりして」と受ける。得意になっている僕を「したり顔」と言います。「お目障り」ではなかったでしょうか。